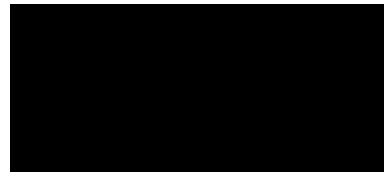
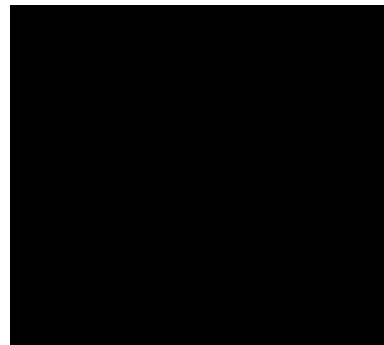


ばらで  
いん



**обсерватория  
планету**



惑星ゴルディロックス・スリーの表面に  
浮かんだ小さな膜、低軌道プラットフォー  
ム、ノーチラス。

すれ違う者もない静まり返った象牙色  
の回廊に足音を響かせながら、栗毛を揺ら  
して小柄な暴君は傲然と歩んでいた。

プラウダ高校三年生、カチューシャ。彼  
女。いや、女性の姿をした彼は、自らの将  
来を決定するための試験に挑むため今日こ  
こにやってきていた。

すれ違った案内板には、彼の進行方向と  
逆の方向へ矢印が示され、じわりと時間を  
置きながらその表記が各国語に変化してい  
く。書かれている文字は、地文台アストラ  
イア。人類の故郷、地球の古い伝説に記録  
されていた空から地上を見守る乙女の名を  
冠されたそこは、低軌道上からテラフォー  
ミング中の惑星を観測し、その変化を観察

し続ける人類の眼である。

「当然、受かるに決まってるわよ」

案内板を一瞥し、自信満々にひとりごちる。戦車道部の隊長を務める一方で、彼はずっと空を望み続けてきた。

むしろ全国優勝経験を得てもなお、戦車道は余技だったともいえる。

元々プラウダ高校は理工系への進学率が高いが、彼はその中でも地文台への勤務という目的を持って入学以前から邁進し、手段としてプラウダへ入学した。

そして今日、その結果が出た。

飛び入学試験の最終関門である面接試験を突破し、新東京大学が運営する惑星環境研究所への入所が決定したのだ。

これで、来年からはこのノーチラスでアストライアに勤務できる。

自然とほころぶ顔を、しかし回廊の出口

に差し掛かったところで引き締める。

通路の結節点に設えられている小ホールには、なぜか一緒についてきたノンナがソファに座って待っていたからだ。

足音に気づいて氷像のように感情が窺えないその顔を動かし、長い黒髪を揺らした彼女へ小走りに走り寄りソファに飛び乗ると、カチューシャは朗らかに口を開く。

「合格したわ。これで来年からはここで暮らせる」

「おめでとうございます」

表情を崩さずに淡々とした口調で祝福の言葉が述べられたが、それが本心からのものであるのは幼馴染であるカチューシャには理解できるものだった。

かつて厳冬の地で肩を寄せ合い、澄んだ星空を眺めていた頃から。

学園艦に入学したときマストで肩車をし

てもらい、さらなる高みを臨んだ頃から。

この寡黙な幼馴染は常に一番の理解者でいてくれた。

それは力チューシヤにとってささやかな誇りである。

高校に入学してから戦車道を始めたのは、彼女が戦車道を選択したから。

恩返しのもりだった。

男子の参加はどうかという声も一部からは上がったが、実力と恵まれた容姿による女装で黙らせた。

背が低いせいでノンナをはじめとする女子部員からマスケットのように可愛がられたのは、彼にとって不本意ではあったが。

「春でお別れだけど、ノンナも頑張んなさい」

隊長の威厳をもって訓示をしたつもりだったが、彼女はうっすらと笑みを浮かべ、

膝の上で押さえていたバインダを開く。

「私も新東大の後期過程に合格しました。春からは惑星物理科の軌道キャンパスになります」

カチューシャの顔がすうとうつむき、前髪で表情が隠れる。

「何よ」

頬に赤みがさす。

「何よ何よ、カチューシャについて来たかったわけ！」

感情が一気に高ぶり、駄々っ子の声になる。

「それもあります」

「そんなのカチューシャは頼んでないんだから！ ノンナはノンナがやりたい事をやればいいの！」

「ですから」

あくまで冷静に隊長へ事情を説明しよう

とする彼女を、涙をにじませながら力  
チューシャは拒絶する。

「そりゃカチューシャはずっとノンナと一  
緒だったわ。服だってお下がりを着せても  
らってたし、いつも一緒に遊んでた！ ノ  
ンナがずっと世話をしてくれた！」

ソファを蹴り上げて立ち上がると、さら  
に続ける。

「だからって、ノンナの進路を縛りたくな  
い。カチューシャについて来るんじゃない  
で、ノンナが自分で決めなきゃいけない  
の！」

息継ぎなしに咳き込みながらひとしきり  
喚くと、彼は肩で息をしてよろけつつホー  
ルの通路を出て行く。

「知らないんだから」

そう、言葉を残して。

「急だったかもしれないね」

眉根を落としながらカチューシャが乱したソファを元の位置に戻し、ノンナは呟く。



いくつかの小ホールを抜けてカチューシャが訪れたのは、惑星のモデルやテラフォーミングの沿革、アストラライアの観測データが表示される一般向けの展示スペースだった。

この惑星に到達した世代移民船の模型、開拓初期に惑星へ打ち込まれた楔と呼ばれるテラフォーマの設計図、学園艦をはじめとする惑星降下船の模型やホログラムがところ狭しと並べられ、壁面にはアストラライアがとらえた地上の様子が表示されている。大型の島を丸ごと都市化したトライヨーク、軌道から投下されたメガフロートで形成された新東京、大陸中央部で生物のような成長を遂げている興洛といった大都市は、



惑星の発展を象徴する展示として大画面で表示されている。

しかし、それらのどれもこの惑星全体から見ればほんの三分の一ほどに過ぎない。息が整ってきたカチューシャはつまらなさそうにそれらを眺めて鼻を鳴らし、別のモニタ群へと目を移す。

そこに映されているのは、人類がまだ手をつけていないゴルディロックス・スリー本来の姿。

この星独自の動植物が生態系を築いている湿潤地帯、激しい嵐で地上を捉えることすら困難な永久凍土、砂と岩塊が広がる沙漠地帯。

カチューシャの瞳はそれに奪われる。遙か彼方の地球から千兆の希望として宇宙へ旅立った人類が見つけた世界本来の姿。そしてそんな人類未踏の地でも、人類の

尖兵は活動している。彼らは蜘蛛のような四対の脚で地上を徘徊し、資源を採掘して内部のプラントで精製する。

「マンシヨニヤツガー。人間狩猟機とはよくいったものだね」

弦を爪弾く音に振り向くと、そこには夏休み共に戦った戦友がいた。チューリップハットを被った中性的な容貌の青年とも取れる、他の高校生より大人びた雰囲気。

「継続の、ミカーシャか？ 何でここに」

「君がここにいるように」

調子が狂わされるのを感じたカチュー

シャは頬を膨らませ、息と一緒に言葉を吐き出す。

「あれを見にきたの。人類をダメダメにした機械をね」

ミカは永久凍土の地で資源を採掘しているマンシヨニヤツガーを一瞥すると、楽器

をひとつ、ふたつと爪弾いて眩く。

「彼らのおかげで人は生きるために働くことをしなくてよくなった。それはいけないことなのかな」

「当たり前でしょ！ 人類は必要に迫られないとやる気を出さない、それをあの機械たちは奪ったの」

カチューシャは言葉を荒げてミカに食って掛かるが彼はそれを意にも介さず彼女との距離を詰め、その手を取る。

「何するの！」

「だからこの星で人は余裕を持って生きてられる、それは違うのかな。それに」

「それに、何なの」

「やることを失っても、ただ彼らに生かされるだけの存在として人は生きていけないじゃないか」

ミカはカチューシャの手を握り、人間の

尊厳を狩猟する機械の群れが映るモニタへふたりで目を向ける。

「あんたみたいに絶望しても自棄を起こさない人類なんて一握りよ。それに、何で戦車道みたいな選択科目があるか、意味を考えたことがある？」

「何でだろうね。そもそも意味なんてあるのかい」

はぐらかすように喋るミカを無視した、カチューシャはもはや聴衆のない演説を行っていた。

「目的を人工的に作り出すためなの！ 生きるために生きることができなくなった人類は、自分で目的を設定しないといけなくなっただわ」

その言葉を聞き、今まで曖昧な表情だったミカはくつきりとした笑顔を見せ、もう片方の手もカチューシャに押し付けた。

「だから、なれなれしく触らないで！」

「納得できた、それが君の戦車道だったんだね」

「駄目だったわ。夏休みの戦いでそれがわかったから」

カチューシャは惘然として俯く。彼にとつて、大洗の存亡を賭けたあの戦いは勝利したものの納得のいく結果ではなかった。

「みんなカチューシャを守るために犠牲になった。あの子たちは目的を与えられてるだけ」

声が震えだすカチューシャの背にそっと腕を回し、ミカは続きを促がす。

「カチューシャだけが暴君じゃだめなの。全員が自分で自分のことを考えて、目的を決められる暴君でない」と

でない、あの機械たちに負けてしまう。「それはとても難しいことだよ。人は皆、

君のように強くはない」

「強くないとだめなんだから。ノンナのことも信じてたのに」

脚の力が抜けくずおれるカチューシャの  
上体を腰を曲げて支え、微苦笑を浮かべる  
ミカ。ソファまで連れて行くため太ももへ  
手を回そうとしたところで、背後から声か  
かかる。

「それは違います」

ノンナはカチューシャとミカの間割り  
込み、慣れた手つきで手早く背中と脚を支  
えてソファへ座らせた。

「私や同志は自分たちの意志でカチュー  
シャが生き残るべきだと判断しました」

赤く腫れた眼でカチューシャはノンナを  
見上げる。

「あのとき、私たちは命令を躊躇うカ  
チューシャに生き残れと命令する暴君だっ

たんです」

ノンナは優しくカチューシャの髪を撫でながら続ける。

「指導者が役目を果たせなくなったとき、個々の同志が適切な目的を見出す。これを指導したのはカチューシャです」

「そう、かな」

「ええ。そして部員たちにも受け継がれていくでしょう」

「気休めは、やめて」

そう言ったカチューシャの顔はしかし、確かに笑みを浮かべていた。

「そしてもうひとつ、誤解を解いておかねばなりません。私が新東大を受験したのは、私の意思です。カチューシャとずっと星を見てきたんですから」

弦を爪弾く音がひとつ。

「大切なものは見えないものだからね」

「あなたは少し外していてくれませんか」

氷の視線を投げかけられたミカは、素直に展示室から離れていく。それを見届けたノンナはカチューシャの耳元へ唇を近づけ、そつと言葉を紡ぐ。

「あなたは星ばかり見ていたけど、私は星とあなたを見ていたんだから」

ノンナが頬を赤らめて顔を離すと、カチューシャは彼女の顔をまじまじと見つめる。

「そうじゃないと、男の子の肩車なんてしません」

そういつて顔を少しそむけたノンナの前に普段の饒舌ぶりを失ったカチューシャは大きくまばたきをしながら立ち上がると、ぎこちなく声を出す。

「何よそれ、卑怯よ。こんなときに」

「これでもカチューシャのことはカチュー



シャ以上に熟知しています」

涼しい顔でそう言ったノンナの顔は、確かに笑っていた。



しばらくして展示室から出てきたふたりを迎えたミカは言う。

「これからみんなでお風呂に行くのはどうだい。ここからは地上も星も見えるようになってるしね」

「顔がぐちゃぐちゃだし入るわ」

「もう少ししたら毎日入ることになりそうですけど。それからミカさんはあまり力チューシャをからかわないようにしてください」

回廊を進みながら、カチューシャはふと疑問を口にする。

「ところでミカーシャは何でここに來たの？ 試験会場では見なかったけど」

「母船でやっていた新恒点観測員試験の帰りさ。新しく人が住める星なんて人が一生かかっても見つからないかもしれない、だけれど可能性はある。そういうのが好きなのさ」

「人類に絶望してる割には千兆の希望のひとつを探そうとしていたり、矛盾ね」

「カチューシャ。彼は詭弁が好きなだけですよ」

「ここでは見つからなかった別の形の希望が生まれるかもしれないじゃないか」

浴場に着いたカチューシャは、ふと足を止める。

「プラウダのお風呂は個室だったけど、どっちに入ればいいのかしら」

〈了〉